

875 東北帝国大学遠征の記

〔『法学新報』第35巻12(407)号 大正14年12月1日〕

○東北帝国大学遠征の記 吾か中央大学に於ては質実剛健の名の下に柔道及剣道は学校当局の奨励もあり其の發達も容易なりしか競走会の如きは先輩の努力も多かりしに拘らず其の進歩は遅々たりき然るに最近急速の進歩をなし過般巴里の万国オリムピック大会に田代選手を出してより今年の如きは三名の国際選手を晴の舞台極東のマニラに送るに至れり未だ本学開校以来嘗つて中央大学競走会の名の下に遠く選手を派遣することなきも今回同大学体育後援会援助の下に部員の有志か東北帝国大学運動会の全国各専門学校千六百米リレーレースに出場することになり予科佐坂、三橋、専門部佐藤津島の四名選はれて参加することとなり東都の競技会に於て相当の自信もあり他校の実力も略略推測出来たるものの初陣の遠征であり勝たねはならぬ責任もあり張りつめたる心にて必勝を期し岡本主将の沈痛なる激励の言葉に送られ仙台の地に向へり戦は時の運であるとの言葉に脅かされつつも堅き決心と山の如き自信にはやる若人の血潮を抑へつつ策戦をめくらしつつある間に汽車は仙台に着く明日の勝利を祈りつつ静かに寝に就けり明くれば三十日愈々戦の晴の舞台は近づきぬ古色蒼然たる昔伊達家七十万石の威を偲はせる仙台の街はとんより

と曇り重苦しき空気に抑えられて殊に落ち付きを見せたり空は次第に晴れ新鮮なる暁の空気を破りて合図の煙火が響わたりぬ老松に囲まれたる旧二校グラウンドには白線鮮かにフィールドの青草しつとりと露にぬれて居るのも自ら心の落着きを暗示せるものの如く思はる戦ひの時刻は迫れり昨年の優勝校早稲田高等学院の選手は既に勝算なきを知れるや参加を棄権し碓山主将独り悄然として優勝旗返還式に臨む栄枯盛衰の定めや実にあはれなりき莊重なる召集員の声に各校の選手は必勝を期し各自運動場に姿を現す競技者の胸に喰ひ入る如きスターターの笛の音に佐藤選手殊に落ち付きし態度を示し北海の健児北大予科東北の勇者二高選手を向ふにまわしスタートに立つ騷擾を極めて居た観集「衆」は此の日の最後を飾る競技や如何にと何れも二高の勝利を祈るものの如く二高二高と声援しつつ片唾を呑みて数万の目を等しく此の三名の身邊に注きたり静寂を破るピストルショットに三名は駆け出せしか佐藤一足遅れて三位に落ち其のまま二百五十米を自重して走り得意の老練なるラストヘビーに依つて二者を約五米離して佐坂に渡す佐坂終始自重し最後の力走効を奏して更に五米の差を加へ拾米の間隔にて三橋に渡す三橋全コースを緊張して力走せしか他校のサードランナー物凄きスピードを以て肉迫し接近して離れず津島バトンを受取りし時は二着との差僅かに一米となる然れとも熟練せる津島は悠々とリードせしかは北大の今井超走せんとして相並ひしか終にコーナーを抑へられ納戸をして戦慄「慄カ」せしむる程の津島のラストヘビーに依

つて益々差を生せしめ約三十米を離して断然優勝し昨年の記録を拾秒縮め三分三十八秒五分の三の好記録を残してゴールに入れり斯くて只一人の応援者無き彼の運動場に於て四名は相抱て優勝の喜びに涙くみたりき(部員報)